

東京大学大学院人文社会研究科

次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣

帰国報告

派遣生の基本情報

植田裕基

東京大学文学部言語文化学科言語学専修課程 3 年

平成 24 年度推奨プログラム CLA 派遣 (学部生)

研究課題

テーマ

『フランコフォニー (特にアジア、アフリカなど外縁部) におけるフランス語文化』
« La culture de la langue française en Francophonie (spécialement la périphérie comme l'Asie et l'Afrique) »

派遣先での活動

(1) 派遣先の基本情報

国名：フランス共和国

都市名：ブザンソン

研究機関名：フランシュ＝コンテ大学附属応用言語学センター

(2) 派遣期間

出発日：2012 年 7 月 28 日

授業期間：2012 年 7 月 30 日～8 月 24 日

帰国日：2012 年 8 月 27 日

総日数：31 日

主な研究成果

(1) 当初の計画の概要

アフリカ、アジアなどヨーロッパ以外のフランス語地域で、フランス語がどのような役割を持ち、現地の文学はどのように形成されたのか。例えば、カンボジア文学の場合、カンボジア内戦の前、主な文学の担い手はフランス式の教育を受けたエリート層である。フランスとの文明の差を感じつつ、カンボジア人としてのアイデンティティをどのように形成していったのか、またそのアイデンティティはどのようなものであったのか。

(2) 実際に達成された成果

CLA の授業は口頭での表現力を磨くものが多く、テキストを読んだり、ラジオなどの音声資料を聞いたりして、口頭で要約するものが主であった。滞在方法はホームステイを選択した。外国語で綿密な意思疎通を図るのは容易なことではなかったが、大変よい訓練になったと思う。

当初の私の研修の目的はクメール語研究のためのフランス語運用能力向上だったが、CLA、ホストファミリーを通じて、新しいものにも出会った。その一つがアルザス語であり、フランス語学習の傍ら少し勉強し、文献も収集した。

アルザス語は高地ドイツ語のうちの上部ドイツ語の一種で、アルザス地方で話されている言語である。標準フランス語よる言語の平準化が強く推し進められてきたフランス国内では珍しく現在もある程度の話者を擁し、ストラスブール、コルマルなどの都市部でもアルザス語を聞くことができる。しかし、実感としては、フランス人の間ではあくまでも *patois* (俚言) と見なす傾向が一般の人々の間では強いのではないかと思った。私が知り合ったアルザス出身のフランス人女性はアルザス語を理解することはできるが、完璧に話すことはできないらしい。彼女はアルザス語を大好きな祖母とのコミュニケーション手段として使っただけで、それ以外の日常生活ではほとんど用いていないようだ。

標準ドイツ語との違いとしては、フランス語からの借用語が多さ (なお大部分の語彙はドイツ語系である)、母音の違いや両親破裂音、歯茎破裂音、軟口蓋破裂音における有声・無声の区別が完全に存在しないといった点があげられる。

(3) 今後の研究展望

今後はフランス語、クメール語の学習を継続し、研究テーマに向けて文献調査を進めたい。しかし、今回出会ったアルザス語を始め、その他のフランス国内で話されているオック語やブルトン語、ベルギーで話されているワロン語も、その言語をとりまく人々の意識を考える上で大変興味深いと思った。派遣前は研究対象をクメール語に絞っていたが、もっと広い視野で考えてみたいと思う。将来的には現地での調査も視野に入れつつ、まずは文献調査を中心に研究を進めていきたい。